

保育者と研究者が一緒になって保育を描く



子どもと共に暮らすとは……
～生活の中の「、(点)」(続き)～



今年度から「保育者と研究者が一緒になって保育を描く」という連載を始めました。この連載では「保育者が実践し、研究者が分析する」という役割分担を越えて、「保育者と研究者が一緒になって、保育を描く」という共同作業にチャレンジしたいと思います。

第2回の今号に参加したメンバーは、関東学院六浦こども園の保育者である久保文香さん、村松直人さん、石塚香苗さんと、研究者である久保健太です。

(構成：久保)



保育者自身の言葉を（久保健太）

関東学院六浦こども園の保育者の皆さんは、自分たちの保育を理解するために、〈大きな「、(点)〉と〈小さな「、〉という言葉を編み出しました。「、」とは子どもたちの育ちの「節目」です。

大きな「、」は、園生活の中で、行事や活動などの経験を通して育ち生まれる「、」です。小さな「、」は、日常の中の子ども自身の興味、関心に基づいた経験を通して育ち生まれる「、」です。

それでは、大きな「、」と小さな「、」とはどのような関係にあるのでしょうか。前号に続いて、久保文香さんに「冒険遠足」の様子を書いてもらいましょう。

久保文香 関東学院六浦こども園保育教諭。
石塚香苗 関東学院六浦こども園保育教諭。

村松直人 関東学院六浦こども園保育教諭。
久保健太 大妻女子大学家政学部児童学科専任講師。

冒険遠足（久保文香）

* 家庭との連携

クラス便りをこまめに出していき、子どもたちが話しあっている進捗状況を伝えたり、「こんな場所に行きたいみたいだけれど近くにありませんか？」と保護者の方にも共に考えってもらう場面もあった。クラス便りには普段から「一言コーナー」という、保護者の方からお家での様子やクラス便りについての感想などを自由に書いていただくコメント欄を設けているので、普段以上にその機能を活用して、子どもたちがお家でつぶやいていることも知ることができた。また、話し合いの経緯や決まったこともその都度伝えていたので、保護者の方も子どもたちと同じ気持ちで当日を楽しみに準備したり、遠い場所に行くグループ（わが子のグループでなくても）を一緒になつて心配したり応援する姿もあった。

* Tシャツ作り

士気を高めるためにグループごとにTシャツを作ることにした。これは保育者が計画した、冒険遠足に向けてのお楽しみ企画。園庭の葉っぱのこすり染めと、染料を使った絞り染めを楽しんだ。色はグループごとに1色を話しあって決めてもらった。冒険遠足の内容の話し合いが始まって日がたっていたので、話しあうという慣れてきていた子どもたち。一つの色に絞っていくのは思ったより早く決まり、わくわく準備が進んでいった。



* 当日

雨のため1日順延になり、より楽しみが増していた子どもたち。当日は張り切って自分たちで作ったTシャツを着て登園。同じクラスでもグループによって行き先や目的が違うため、お互いに「行ってらっしゃい」と少し緊張もありながら声を掛けあい、それぞれの道に進んでいった。担任も自分のクラスには3グループあるが、そのうちの1グループとしか一緒に行けないので、他の2グループの様子もとても気になり、半分親のような気持ちで他の2グループを送り出したことを覚えていいる。各グループを担当している担任以外の先生とは事前に打ち合わせをしたり、グループの子どもたちと「一緒に行こうね!」と声を掛けに行ったりして当日を迎えていた。

5キロ先にある公園に行くことを決めていたグループは道のりとしては一番長い距離を



歩くグループだった。子どもたちは「自分たちなら行ける!」と思っていたようだったが、周囲の大人のほうが心配していた。「もし15時に園に戻ってこれなかったら迎えに行く覚悟でいます」と話す保護者もいた。保育者も時間を見て、行きの時点ですぐ着かないことが予想される場合は予定より手前に目的地を変更して折り返すこと等も念のため想定した。やってみなければわからないので、多少無謀と思われる子どもたちの計画だったが、

仮にたどり着かなくてもそれはそれで経験になる、と考えていた。実際は地図を片手に現在地を確認しながら歩き、まだまだ先に目的地があるときも「ここまで来れたのか」とつぶやき、「遠いよ……」という声ではなく、「もう着くかな」と終始わくわく自信をもって歩き進めている姿があった。

まず無事に目的地に着くと、自分たちで計画しただけあって、次にやりたいと思っていたことに取り掛かり始める子どもたち。このグループは道中が長いので子どもたちが選んだ公園で滞在する時間が短い、もちろんそれもわかった上で選び取っていたので、子どもたちからの不満はなかった。多少の疲れはあったように見えたが、お弁当を食べてすぐに回復した子どもたち。トンボを追いかけて走り回り、遊具で全力で遊んだりシャボン玉を吹いたり満喫していた。

帰り道はさすがに口数が減り、歩くペース



もややゆつくりになっていたが、「○○チームはちゃんと行けたかなあ」と他のグループにも思いを馳せながら歩く姿もあった。大幅に遅れることもなく無事に園に着くと、「行ってきたよ!」と得意げに報告する子どもたちだった。

* 冒険遠足から帰ってきて

どのグループも自分たちが考えて計画したことを本当に実現することができ、プラスチックで当日ならではの面白い予想外と出会い、充実した表情で冒険遠足から帰ってきていた。自分たちでもできるといふ手応えも感じ、自信につながっていたようだった。その後の生活の中でも「自分たちはみんな話しかけて決めてくれた」「どこまでも歩けた」「友達がいると力が出てきた」という経験を節々で思い出し、何かあったときも「自分たちなら大丈夫」と立ち戻れる心の糧になっていたように思う。また、担任以外と冒険遠足に行ったグループはその先生たちとも、出会うたびに「あの時こうだったよね」と話したり、「楽しかったよね」と話していた。1日の冒険遠足だったが、同じ時間をじっくりたっぷり味わった仲間同士ならではの結び付きが生まれていたように感じた。

また、今回の冒険遠足は子どもたちが計画したことだけでなく、少人数のグループだったからこそ実現できたこともあったと思う。一人ひとりの興味、関心を、子どもたち同士ももちろんだが、保育者もキャッチしやすく、当日湧き出てくる「ちょっと見てみたい」「これ何だろう?」をじっくり楽しむ余裕も出てきて、より充実できたのではないかと感じた。

大きな「」とは (村松直人)

これまでは園行事、年中行事、保育者の投げかける活動など、願いをもった保育者の打つ「」(大きな「」)が多かったと考えられます。大きな「」を再考していくと、小さな「」を読み取り続ける保育者がいることで大きな「」にも余白や幅が生まれてくると感じます。大きな「」は、子どもたちの育ちや興味、関心を踏まえ、子どもと共につ

くり出していくものではないでしょうか。つまり、小さな「、」の存在なくしては、大きな「、」は存在し得ないと考えます。大きな「、」は子どもと大人が互いに織りなすものであり、関係や集団の中で自らかかわろうとし、自分を發揮し他を（善いも悪いも）認めながら共につくり出していくと考えられま
す。大人も大きな「、」の中では、関係や群れ、集団の中の一人として作用していきます。それは子どもと同等に活動の担い手として盛り上がった
り、落ち着いたりを繰り返すものではないでしょうか。

上述したように、大きな「、」の存在は、子どもと大人が互いに織りなすことにより打たれるものであると考えています。それは、保育者や子ども両者にとって季節の巡りや育ちを確認できるものであり、日々を形づくるタクトのような存在であると考えています。

今回はここまで（久保健太）

今回も、久保文香さんに冒険遠足の実践について書いてもらいました。さらには、その実践を通して、大きな「、」と小さな「、」の関係を考えました。小さな「、」は子どもたちから生まれてくるもの。例えば、クラス便りを通じた家庭との連携を通して、小さな「、」を読み取り続けることで、子どもと共に、大きな「、」をつくり出していける。そんなことがわかってきました。

次号では「私の場所見つけた」という実践を通して、さらに考えを深めていきます。